

『母の桜』

第8回 言の葉大賞®

今年も、庭の桜が咲いた。

母は息を引きとる直前まで桜の枝を握りしめていた。それは、娘が山形から取り寄せてくれた『啓翁桜』、当時、母の目は疎くなっていたが、その分、嗅覚が冴えて「この桜は香がする」と言って喜んだ。

桜は、母が亡くなった後も捨てがたく、その枝を庭に植えた。根っこがない切り枝なのに、なんと二本が根を張り、一昨年から花も咲くようになった。『母の桜』である。

七年前、母はレビー小体型認知症でパーキンソン症状があった。失禁・幻覚・ピアノを弾いていた長くすらっとした指も、硬直しスプーンを握るのも、歩行も困難になった。まだら認知で正気な時はどんなに辛かったか。その中でも耐えがたかったのは父の言葉。失禁すると「なぜ、こうなるのだ」幻覚が出て、廊下が水浸しと言って、チラシを敷き出すと「水道は壊れてない!!なぜ、わからんのか」

「お母さんは病気だから」と言っても、父は認めず「なぜ」と繰り返すばかり。毎夜、諍いが絶えず、その度に、私が仲裁に入った。

現在父は九十三歳。母の死後、転倒してから足の運びが摺り足になり、今は歩行が困難。毎日、日中は机に向かい、古文書を読んだり書道をしたりの生活。母は何時でも「ありがとう」と言ったが、父にはそれが無い。「実の子に世話してもらって幸せですね」と言われても、肯定も否定もしない。娘が六十七歳になっても、変わらぬ厳格な父である。時には、意のままにならないと激高する。

つくづく思う。介護は一律でない。その人の人生の延長線上にあり、人夫々で違う。父は父。戸惑いながらも、逃げずに父と対峙できるのは、夫、子供達の支えがあるからだ。

今日、暖かい日差しに誘われて、父に手を肩を貸し、外に出た。『母の桜』の前に立ち、ふたりとも無言であった。

しばらくして、突然、父の声。

「ありがとうな」